

平成2年度 モズク養殖生産者会議の開催

生産者間の意見交換の場となればと、スタートして、平成2年で4回目になります。これも偏に生産者の皆さんの積極的な協力によるものと感謝しております。

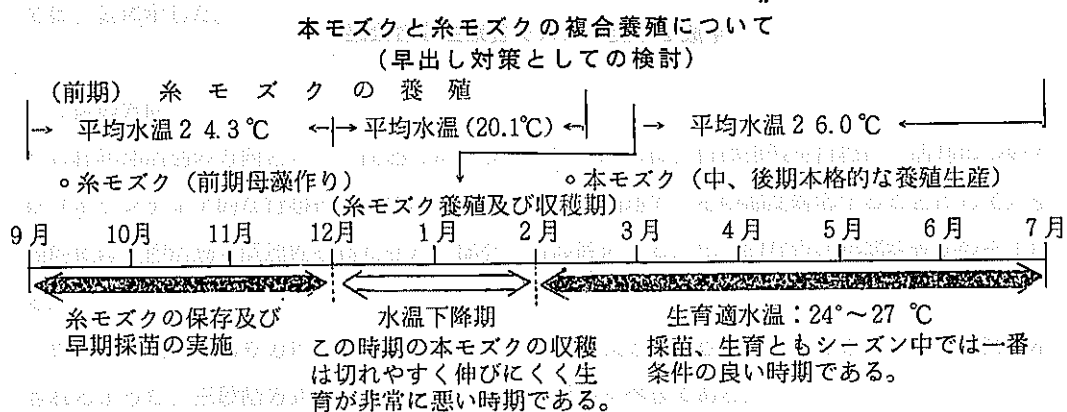
開催するにあたって、大変勇気づけられることは、生産者の皆さんが年1回の会議を楽しみにしているという声が多いということでもあります。たしかに、会議内容は、技術交換会ということではありますが、モズク養殖をとおして、人間的な触れ合いが感じられるとのことで、生産技術をこえた交流の場となっており、非常にすばらしいことではないかと思えます。今後とも、ご協力下さいますようお願い致します。会議は、平成2年10月30日午後1時30分より、水産業改良普及所会議室で行われました。

会議では、各地区の生産状況報告（14漁協、60名参加）を受けたあと、事例報告として、(1)本部地区における3段階養殖の必要性について、指導漁業士我部政祐氏（本部漁協）による報告があり、さらに、(2)宮古狩俣地区における、主に糸モズクの養殖について、生産部会長川満寿明氏（平良市漁協）により報告がありました。それぞれの事例報告を受けた後に、全体討議が行われました。その中で、本部地区で実施されている、3段階養殖の必要性について、昭和62年度に調査報告（水試普及所）されているが、何故、育苗漁場、中間育成漁場、本張り漁場ともに生育のちがいがみられるのか、経験的に潮流や底質のちがいによるものではないかといわれているだけで、体系的な調査研究までにはいたっていない。したがって、今後の調査研究の方向として客観的に把握された環境条件（客体環境）と生物現象（主体的環境）との関連性を体系的に探究し、検討する必要があります。また、狩俣地区の糸モズク養殖については、種保存の困難性、さらに、糸状体採苗網が本モズクに変わる話など、糸モズク養殖全般についての質疑が多かった。

そのことについては、糸モズクに関する生態的な知見が少なく、現在、技術改良試験をとおして調査研究中であり、後日、改めて報告したい。若モズク対策についての問題提起もあったので、ここでは、その考え方を図で紹介するにとどめる。

『春の海モズク茂る水清き』

（瀬底）

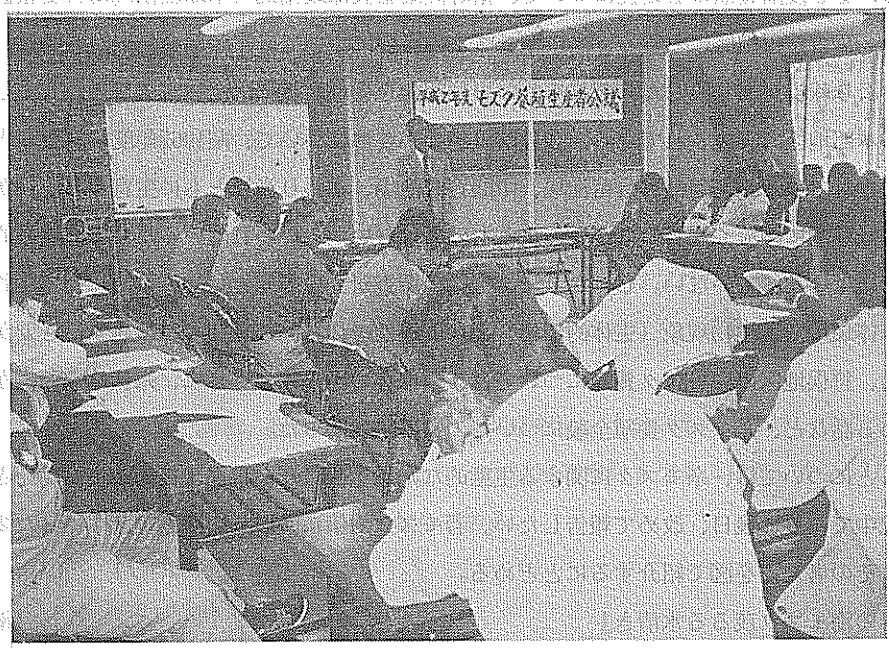


○本モズクの後期養殖の大きなねらいは

- (1) 早期収穫モズクは保存の段階で「イタミ」が早く、とけやすい。
- (2) 12月から1月にかけては水温下降期であり、モズクの生育が非常に悪い。
- (3) したがって、9月から1月にかけては、あくまでも母藻作りとして考える。

※(4) 本格的には1月から2月にかけて採苗し、4月から5月、6月、あるいは7月にかけて収穫する。製品管理の面からもこの時期のモズクが質的にも、また、長期保存にも十分もちこたえる製品ができるからである。

- (5) 養殖及び品質管理の面から『前期は糸モズク養殖』を実施し、『後期は、オキナワモズク(本モズク)』の計画生産による複合養殖の確立。



平成2年度 モズク養殖生産者会議
(採苗のメジャと採枝の出発)

